

十月の法話 抄録

阿弥陀如来の本願とは

釋 法薫

九月の合同彼岸会の感話の時に大切な主人を亡くされた方がご来寺下された。『お寺に来て悲しみが……。でもこの場にいると何か心が晴れてくるような気がします』。

その時、最愛の奥様を亡くされ、一念発起で僧侶になられた方が、『一周忌は皆様の励ましで過ごせました。三回忌の時、三寶寺の御住職がよくがんばりましたねと、涙ぐんで語ってくれました。七回忌を迎えて本物になりますと言ってくださいました。どうぞ、三寶寺の御住職の所へ来られて、これからも苦しさを語り、ご法話をお聞きください』と答えて下さいますと、『母をもつと私がささえてあげられればと思っております』と隣席の娘さんが語られました。

阿弥陀の本願は、必ず苦悩の有情をすてずして、合掌、読経、聞法によって寂滅し、涅槃を得させるのです。

すでに身内の娘さんが『ささえます』と、光明なる心をあらわしています。自宅の御仏壇に向かい、今日私は何をさせていただけることがあるか、悲しみに沈んでいる中にも、私を必要としている、なにかが見えてくるはずですよ。

合掌、読経の中で、故人の尊い法名を拝読することで、私への今日の生かされ方が聞こえてくる、見えてくるのです。間を意識されたら仏壇の法灯を、さらに奥にある阿弥陀如来を黙視して、「苦悩の有情をすてずして」をいただくことなのです。しかし、ご自宅ではどうしても限界があります。お寺は、いろいろな悲しみを背負った人がお寺の行事に参加することや、他の人への奉仕をさせていただくことで、私だけの思いが寂滅していけるところです。住職の言葉だけでなく、三寶寺によって法の人となった人の話をいただきにきてください。だんだん明らかになっていきますよ。いつでも法の友の方々がお待ちしております。

合掌

門信徒の会よりお願い  
本山からの住職任命を受けて

去る10月28日の「住職任命式」によって、めでたく本山より住職の正式な辞令が降りた御住職に、「なにか記念品を贈ろう」とのご提案が伊藤孝男氏よりありました。門信徒の会では一口3,000円の懇志をつのり、記念品を購入する予定です。次回定例法話会(12月13日)にて皆様にご募りしますので、ぜひご協力ください。

お釈迦様(ブツダ)のさとり道

誕生は、人としての誕生の祝いである。三寶寺に誕生を祝うお経を依頼された。「赤ちゃんができました」と、父親から電話があった。「お経を願いました」この父親の喜びは、私たちを選んでくれてありがとう、親としての誕生の喜びでもあった。母なる人の信心は寿を育む母としての喜びを示していた。稲津先生の教えの中に、『母なる人は自分の中に宿りたいのちに手を合わせてごらん下さい。さずかりものの仏子として尊くなるのです』敬い生活をさらに、仏子に対してたくさんの縁を作っていくことが大切である、と言われておりました。誕生を祝うのは4月8日の花まつり、入参式(初参式)、この時甘茶をかけて親が子にお釈迦様と同じいのちの誕生を祝う。そして親が子に感謝する。この時儀式をもって人として生まれたことを喜ぶ。三寶寺ではこの時仏としての誕生を祝う証明を送付いたします。年齢は初参式に参加しようと思つた時です。中学1年生の女子が参加いたしました。宮参りと違つところは七、五、三歳にとらわれないことです。誕生はお寺から仏子の誕生として、親も子も祝つてもらつと互いに共通の寿なる祝いができるものです。

出家以前の釈迦は

父親シュッドーナ

実母マーマ

——(釈尊を生んで7日後に死亡)

養母マハーパジャーパティ(王の後妻となり、釈尊の養育にあたる)

釈尊は父シュッドーナの跡継ぎとして、期待され育てられた

釈尊(16歳の時)

——ラーフラ(一男もつける)

妻ヤシヨータラ(父親の勧めにより結婚)

(「図解雑学仏教」廣澤隆之著 p27 ナツメ社刊)

妻も息子も、釈尊が悟りを開いた後に帰依し、出家した。

息子のラーフラはブツダの十大弟子の一人となった。

出家から成道まで

出家とは、家出とは違つたのである。出家は聖なる希求に促されて、渴愛(これでいいのだらうか)をもって出向していくことである。家出は、嫌だから、自分でおこしたことに責任をとりたくないから逃げ出すことをいう。釈尊60歳の頃、なぜ出家したのかを聖求経の中で法話として語られています。 つづく